『易経』に見るリーダーのあり方

悠久の歴史の中で人々に読み継がれてきた四書五経の一つ『易経』。それは同時に上に立つ者のあり方を示すものとして古来、数多くの指導者たちが考えや行動の指針としてきた指南書でもある。安岡正篤先生の門下で『易経』にも造詣が深い伊與田覺氏と、伊與田氏を敬愛し、このほど弊社より『人生に生かす易経』を出版した易経研究家の竹村亞希子さんに、『易経』が教える将の条件を語り合っていただいた。

易経研究家
竹村 亞希子
たけむら・あきこ　愛知県生まれ。中国古典『易経』を分かりやすく解説する一方、企業経営者や経営幹部に『易経』に基づくアドバイスを行っており、その実績から多くの厚い信頼を得ている。講演活動の一方で、NHK文化センター『易経』講座の講師を務める。著書に『人生に生かす易経』（致知出版社刊）『リーダーの易経』（PHP研究所刊）などがある。

あらゆる問題の解決のヒントが示された書物

竹村　尊敬する伊與田先生とこうして対談ができるなんて光栄の至りです。

伊與田　いや、易の話ということだけれども、僕はいま九十二歳。易を学んだのは随分前のことで忘却の彼方です。それで竹村先生に教えを受けようと思ってやってきました。

竹村　ご冗談を……。一昨年の伊與田先生の『大学』講座（致知出版社主催）は一受講生として参加させていただきましたが、先生が達筆な字で書かれたテキストを毎回音読し、深いお話を拝聴させていただきまして、本当に勉強になりました。

伊與田先生は安岡正篤先生に師事され、数多くの古典を学びご自身を高めてこられたと伺っています。先生が最初に『易経』を学ばれたのはいつ頃のことなのですか。

伊與田　それは忘却の彼方やから、

記憶がはっきりしている竹村先生のほうからどうぞ(笑)。

竹村　お言葉に甘えて僭越ながら私のほうから口火を切らせていただきたいと思います。二十一歳の頃、私はやはり中国古典の『荘子』や『老子』が好きで、小説のように読んでいたんです。その時に『易経』に触れる機会があったのですが、「難しい占いの本だなぁ」というくらいで、それほど引きつけられませんでした。

ところが、一年ほど後のことですが、『易経』の冒頭にある龍の話が占いとしての古図でなく、ものごとの過程として読めることに思いあたり、「これは」って思ったんです。

伊與田　「乾為天」の一節ですね。

竹村　はい。龍の動きが映像としてダイナミックに捉えられて、まるで自分がその中に入ってしまったかのような気持ちになりました。「これはおもしろい」と読み出したところが『易経』に引きつけられまして、以来易経病になってしまいました(笑)。それからかれこれ三十六年です。

伊與田　独学で学んでこられたのですか。

竹村　独学というと聞こえはいいんですが、学問というようなものではないんです。想像力を働かせて何回も読んでいくうちに、シンプルな言葉に多様な意味合いがあることに気づきまして、膨らませたイメージと自分の体験と重ね合わせながら「あの時抱えていた問題の解決のポイントは何だったのか」というようなことを考えるようになりました。

飛躍的に理解が進んだのは、ある方の武道論を読んだ時でした。龍の成長過程が認識論や技術論に重なり合って心に響いてきました。

そうして、『易経』という書物にはありとあらゆることのヒントが書かれていることが分かってきて、読むたびに発見と驚きがありました。その驚きの連続でここまで来てしまった感じです。

伊與田　しかし、『易経』を専らにやっておられるというのは大したことです。古典に親しまれたのは、ご両親の影響もあったのではありませんか。

竹村　父が玄米菜食の運動家で二木謙三先生などとも親しくしていたものですから、書斎には自然食の本に交じって四書五経など古典もありました。そういうものを小さい頃から雑学的に読んでいたことも多少は影響しているのかもしれません。

◎対談――伊與田覺&竹村亞希子

『易経』を筆写 研究に七百時間を費やす

竹村　伊與田先生の『易経』との出合いはどういうものでしたか。

伊與田　そのことを話さなくてはい

論語普及会学監

伊與田 覺

いよた・さとる　大正5年高知県生まれ。学生時代から安岡正篤氏に師事。昭和15年青少年の学塾・有源舎発足。21年大学思想研究所を設立。28年大学生の精神道場有源学院を創立。32年関西師友協会設立に参与し理事・事務局長に就任。その教学道場として44年には財団法人成人教学研究所の設立に携わり、常務理事、所長に就任。62年論語普及会を設立し、学監として論語精神の品格に尽力する。著書に『人に長たる者の人間学』『人学』を表説する』、監修に『論語一日一言』いずれも致知出版社刊ほか。

けないと思って、いろいろと探していたら僕の立命館大学の卒業論文が出てきました。昭和二十二年のものです。僕は卒業するつもりはなかったんですが、学校から「長いこと大学に籍を置いているし、卒業したらどうか」と勧めてもらいましてね。単位は足らないけれども論文でよいというから、易について卒業論文を書いたんです。

「謹んで卒論をご覧いただく諸先生へ提言す」というので、『易経』とのいきさつについて次のように書いています。ちょっと読み上げてみますか。

「私が易学に興味を覚え始めたのは師範学校在学当時でありましたが、適当な師もなく、ようやく『易経』を音読する程度でありました。その後、関西大学国漢専攻科に学ぶようになり、再び興が蘇ってきましたが、雑学に追われ、なお深求を試みる暇はなかったのでした。……（中略）……たまたま昭和十七年夏、安岡正篤先生の易講が開かれることを耳にして、矢も楯もたまらず自業を休んで東上参学しました。その時易道の興味津々として尽きないものを初めて感得いたしました」

竹村　安岡先生が講じられる易はどのようなものでしたか。

伊與田　これもこの論文の言葉でご紹介しますと、

「安岡先生の易学に対するお考えは易は偉大な東洋民族哲学である。神儒仏の諸行にわたってその深奥に入ろうと思えば、易を学ばずしては済まない。易は真に行の学、創造の学、造化の学である」ということです。

それ以来、僕は筮竹を使ったり、多くの本を読んで易の勉強をしました。当時のことを卒論では「占筮のほうも習得したが、私の心に焼き付いて離れなかったのは、易を講じて天真を知る原理の学、修養の学というところにあったのであります」と述べています。

竹村　なるほど、易は修養の学。

伊與田　しかし、僕はいつしか戦争勃発など外界の変転に魂を奪われてしまいましてね。研究はやめてしまうんです。次に易に関心を抱いたのは昭和二十年に応召して間もなくでした。

竹村　ああ、戦争中にですか。

伊與田　はい。卒論には次のように書いています。

「昭和二十年応召して軍隊に入り、幸か不幸か脚気を患い、ある農家に静養する身になったので専ら易に心を沈めました。復員後は有源学舎に太平思想研究所を開設して籠居し、腹を据えて易の研究に没頭したのであります。まず雑多な注釈書に頼ることをやめて、『易経』および十翼の筆写を始め、約七百時間を費やしてこれを玩味しました」

「いよいよ易の正経であることを痛感するようになりましたが、その後西洋哲学や神儒仏等の宗教と比較研究し、また科学的研究を試みても、その広大無辺なるに驚き、聖人がこれを用いた真意が分かるようになりました。それとともに道は一にして古今東西を貫くものであり、脈々として次なる生命への泉であることを信ずるようにもなりました」

……と、まあこういうことです。

竹村　いまお話を聞いていまして、先生と私にいくつかの共通項があるのに気づきました。伊與田先生は学問として易を学んでおられ、私の場合は『易経』は自分ひとりで読み続けておりましたが、『易経』以外の古典に興味のある人たち七、八人が集まり、先生も交えずに東西の古典の勉強会を開いていました。そういう小さな学びでも二十年続けていると、易に繋がっていくいろいろな発見があったんです。

私の勉強会は趣味的な読書会で、東西の思想を組み合わせて、うんうん唸りながら自分の生き方との関連を考えるんです。プラトンやニーチェ、老子や荘子、世阿弥などもやりました。道元禅師とヘーゲルを組み合わせてみた時もありましたけれども、考え続けていくと、すとーんと腑に落ちることがあるわけですね。「あっ、これは『易経』に書いてあることだったな」って。

そして古今の教えが『易経』に通じていることが分かるとますます易が好きになってしまうんです。

伊與田　易はいったん入ると、出られんようになりますから(笑)。

竹村　また、『易経』の音読を続けて七、八年くらいたった頃でしょうか。言葉の意味は分からなくても、どのページを開いてもおもしろいと感じるようになりました。ですから先ほどの先生のお言葉を「あっ、そうだそうだ」とうなずきながら聞かせていただいていたんです。

『易経』の奥深さを実感

伊與田　僕も昨日、忘却の彼方ではあるけれども、久しぶりに易の注釈である「十翼」を一日かけて全部読んでみました。そうしたら、若い時分では分からなかったことがよく分かるんですね。改めていろいろなことを感じているところです。

竹村　『易経』は読めば読むほどおも

しろくなるというのは私の実感です。特に「十翼」の一つ「繫辞伝」はそうだと思います。

私、十年前から名古屋のNHK文化センターで月に二回、『易経』を教えていますが、十年かかってようやくひととおり学び終わるところなんです。

で、いまちょうど「繫辞伝」の最後をやっています。「繫辞伝」を読み進めていくと、たった一行に一時間半もかかったり、きょうはよく進んだと思う時でも三行しか説明できていなかったりするんですが、でも「繫辞伝」には易のエッセンスが詰まっていて理解が深まっていくんですね。皆さん、「おもしろくて仕方がない」とおっしゃっています。私もまた受講生の方々に「『繫辞伝』までちゃんと読んで勉強している人は少ないから、必ず力になりますよ」と励ましながらなんとか十年やってきました。

伊與田　それだけ長く続けてこられたことは感心ですね。

竹村　最初は皆さん、占いの講座と間違えて入ってこられる方も多かったんです。占いを教えないものですから不思議そうな顔をする方もいらっしゃいました。古典としての『易経』を読んで学ぶ講座だと分かると「えっ、『易経』ってこんなにおもしろいの」と大変喜んでくださるんです。

伊與田　そういえば、かつて大阪に洗心洞という大塩平八郎の私塾がありました。明治時代に復元され古典の講義が行われていたのですが、戦争で建物が焼け、その後主任講師の先生も亡くなったものですから、つなぎにと思って僕が昭和三十年に始めたのが洗心講座です。この「洗心」という言葉が『易経』の「繫辞伝」に出てくる。

竹村　「聖人これをもって心を洗ひ、退きて密に蔵れ」（易によって心を洗い清め、一歩退いて精密な天道に身を任せる）という一節ですね。

伊與田　この洗心講座が五十二年間ずっと続いています。

竹村　五十二年間ですか。かなりの回数を重ねたのでしょう？

伊與田　八月は休みだから五百八十回くらいになります。

竹村　それは大変なことです。やはり学び続けることに大きな意義があるのですね。

易に通暁し信望を集めた先人たち

伊與田　先ほども少し申し上げましたが、安岡先生に直接、易学講義を受けたことで僕の『易経』に対する眼が開いた気がします。昭和十七年ですから、ちょうど太平洋戦争が勃発した翌年です。戦争が長期にわたる中で「将来を見通す上で、易は欠かせない」と考えていた時に、一週間にわたる先生の講義があると聞いて、万難を排して東京の金鶏学院に出向きました。直接先生を通して易を学んだことで、少なからずカルチャーショックのようなものを受けましたね。

竹村　それは伊與田先生がおいくつの時でしたか。

伊與田　二十六歳の時でした。竹村先生が易に出合ったのと同じくらいの年齢です。

竹村　あ、そうですね。

伊與田　中江藤樹先生が『易経』に出合ったのも二十八歳の時でした。藤樹先生が近江聖人と呼ばれるのにはいろいろな理由があるでしょうけれども、片田舎にいながら人情の機微や世の動きをじっと見つめておったのは、やはり易学の知識があったからだと僕は思うんです。あの方も易は独学でした。

竹村　独学だったらしいですね。

伊與田　藤樹先生はお母さんに孝行を尽くしたいという一念で脱藩までして近江に帰ってこられます。けれどもやはり『易経』を学びたいと京都に出て有名な先生を訪ねたら、月謝が高くて教えを受けることができなかった。次に別の先生のところに行ったら、月謝は要らないが「易の大要の講義が終わるまで絶対家に帰るな」と。孝行を尽くすために帰ってきたのに帰るなと言われても、残念ながらとどまることができない。そこで書を求めて独りで学ばれることになったんです。

弟子の熊沢蕃山も二十七歳で藤樹先生に映発されたのか『易経』を学びまして、岡山藩主の池田光政のもとで縦横無尽の働きをし、江戸に出ては大名までが礼を篤くして教えを受けるよう

になる。これも易を通して政治の大要を見通していたからではないかと思います。

竹村　易に通暁していたことが、人々の信望を集めた要因だと。

伊興田　そうでしょうね。政策など物事を見通すのに、仮定ではなく易学の視点で自信を持って判断しておられたに違いありません。

竹村　指導者にとって易の知識は欠かせないものだったのですね。

伊興田　安岡先生もまた古今東西の学に通じておられましたが、いま考えるとその根底にはやはり易があったのではないかという気がします。

竹村　安岡先生は易を独学で学ばれたのでしょうか。

伊興田　僕も一度それを先生に聞いてみようと思いながら、ついにその機会を得ませんでした。しかし藤村與六翁をはじめとする易の大家の序文を先生が書かれていることを思うと、先生の易の知識は相当なものではなかったかということが窺えます。

竹村　余談ですが、伊興田先生と同じように若い頃から安岡先生の易講を受け、安岡教学に心酔していた佐藤久人という方がいらしたんですね。葉剤師の中でもトップクラスの方で、数年前に亡くなられて私は一度もお会いする機会がなかったのですが、その方が『鼎の物指し』という本を出されています。

講演に行った時、ある方からたまたまその本を手渡されて、ぺらぺらとめくっていて驚きましたね。東洋の医学や薬学は易が根底にありますから、『易経』を中心にしながら、いろいろな古典の話が次々に出てくる。しかも学者の文章でもなければ、占い師さんの文章でもない、葉剤師という立場で様々な古典を自家薬籠中のものとされていた。それは見事なものでした。

孔子の教えに息づく易の思想

伊興田　『易経』という古典を一言で表現するとなかなか難しいものがありますが、竹村先生は皆さんにどのように説明されていますか。

竹村　伊興田先生もご存じのとおり、「易の道は深し。人は三聖を更へ、世は三古を歴たり」

という言葉があります。三聖は誰かというと、一人目は伝説上の人物で伏羲といい、易の基本となる「八卦」「六十四卦」を考案したとされます。

二番目の聖人は周の文王とその息子周公旦を指します。紀元前一一〇〇年頃の人で、文王は「卦」を説明する「卦辞」を、周公旦は「爻辞」（卦を構成する六本の爻の説明で変化の解説）をつくったといいます。

そして三番目の聖人は、時代が下って紀元前四七九年に亡くなった孔子です。孔子が最終的に『易経』を整理したと伝えられています。でもこれらはすべて伝承ですので、はっきりしたことは分からないんです。

伊興田　孔子は若い頃はあまり易に興味を示さなかったようですね。しかし『論語』に「五十にして易を学べば」また大過なかるべし」とあり、「韋編三度絶つ」（孔子が『易経』を熟読し、綴じていた革紐がたびたび切れた）という故事もあるように、年を取られてから易を熱心に学ばれている。僕は「五十にして天命を知る」という境地に至られたのも、易の影響があるのではないかと思っています。

というのも孔子は若い時に学問の道を探究し、いろいろな人に学び、万巻の書を読んでおられるわけですが、それでもまだ人間の世界をうろちょろされていた。しかし、易に触れてそれを一歩乗り越えたあたりから、世界観、人生観を確立されていったんですね。

竹村　若い頃の孔子は自分の学問を役立ててくれる国を訪ね歩いた時期もあるようですけれども、それまでは人の言に左右されていたということなのでしょうか。

伊興田　やはり借り物の知識ですからね。単なる学者というのは大概そういうものです。しかし五十を越えて天命を知ってから、何も学者を否定しているわけではないけれども、考えが大きく変化していくんですね。

『易経』の歴史について私が補足させていただくと、そういうことになりましょうか。

五千年間読み続けられてきた理由

竹村　『易経』の成り立ちの説明に続いて、そこに何が書かれているかというお話なのですが、これはおもしろいことに占いを否定する本でもあります。占いのやり方が書かれていながら、『易経』を読めば占わなくても人の出処進退やこの世の中の動き、物事が変わる兆しのようなものが分かるんだと。

伊興田　そうですね。

竹村　そして易には三つの意味があって、一つは「変易」、つまり世の中のすべてのものは時々刻々と変化していく、変化しないものは何一つないということですね。しかし、その変化の仕

「『易経』にはあらゆることのヒントが隠されています」

「歴史上の指導者は易を通して政治の大要を見通していました」

方には法則性があって、それは変わることがない。これが「不易」です。例えば、季節であれば春から夏、夏から秋と不変のルール（不易）があります。でもその春は一年前とは違った、まったく新しい春（変易）なんです。

最後は「易簡」。易が教えていることはとても易しくて分かりやすく、私たちの人生や経営、国のあり方などすべてのことに簡単に応用できるといいます。

このように『易経』に書かれてあることを読み込んでいけば、その法則性を知ることができますから、占わなくても自分の経営や人生のこれからを判断できるわけですね。『易経』が五千年間にわたり読み継がれてきたのは、そういう法則性が人々に受け入れられたからではないかと私は考えています。

伊與田　僕も同感です。秦の始皇帝の焚書坑儒の時、『論語』などの中国古典はことごとく排斥されたにもかかわらず、易の本は残りましたからね。

竹村　あの時は、政権を揺るがすことがなく、しかも生活に役立つものとして『易経』は残されたんですね。

伊與田　その後の時代は政治家や指導者層の間で易は大変重要視されるようになりました。日本においても平安時代の三善清行のような陰陽師は易と関係があるわけだし。

竹村　当時は易といったら呪術的な要素が色濃くありましたね。

伊與田　それから戦後をみても、他の本は二束三文なのに、易の本だけは値が下がらなかった。それだけ『易経』は大切にされていたんです。

江戸から明治にかけての易学の大家で根本通明という人がおられます。僕はこの先生の本が欲しくて戦後、古本屋でそれを見つけた。でも価格が高いんだ。その時分僕は無収入の生活をしていたし、なかなか手が出なかったけれども、算段して手に入れた思い出があります。

陰陽が一つにならなくては万物は発展しない

伊與田　竹村先生の易の話を聞かせていただきながら、いや、なかなかよく勉強なさっていて驚いているところです。

竹村　ありがとうございます。まだまだ修業中の身ですが、そう言っていただけると励みになって嬉しいです。

伊與田　冒頭お話しされたように『易経』には龍の話が書かれていて、上に立つ者のあり方を考えるのに大変勉強になります。せっかくの機会ですか

ら、そのことについても少しお話をお聞かせいただけませんか。

竹村　伊與田先生の前で龍の話ができるなんて光栄です。肝心な部分は先生に補っていただくとして、普段セミナーなどでお話ししていることをお伝えさせていただきたいと思います。

『易経』はすべてを生かす宇宙の根源に「太極」があると説きます。その混沌としたパワーから陰陽の二つが生まれ、この二つがお互いに補い合いながら万物を生成発展させると考えるんです。男性と女性が結ばれて人類が繁栄していくのもそうですね。

これを組織に当てはめると陽はリーダー、陰は守られるべきもの、従っていくものとなりますが、ただ『易経』は便宜的に陰陽に分けているだけで、この二つは元々一つのものなんです。陽は陰によって陽の力を、陰は陽によって陰の力を発揮する。だから陰陽が一つにならないと何も生まれない。これは『易経』が最も強調する部分です。陰陽が交わって新しいものが生まれて、物事は循環していくわけですから。

伊與田　そのとおりですね。

竹村　それで陽の働きのたとえとして出てくるのが『易経』の冒頭にある「乾為天」の龍の変遷です。

『易経』がなぜ想像上の生き物である龍を取り上げるかというと、大自然は天と地が交わって雨を降らせ、その恵みの雨によって万物が生育します。雲を呼んで恵みの雨を降らせる龍の姿にたとえて、人間界においても陽の立場の人はそういう役割を果たしていかねばならないという教えです。

龍だけでは雨は降らせられません。雲は陰ですから、陽である龍が陰である雲を呼んで雨が降るように、陰陽が一つになって大いなる循環を起こしていくには、どうすればよいかが『易経』には書かれているんです。

伊與田　そうですね。

竹村　もう一つ、『易経』を語る場合に押さえておかなくてはならないのは、この書物が「時と兆しの専門書」ということです。そして『易経』が説く時は単なる時間ではなく、時、処、位が三位一体になったものなんです。

これを龍の話で見ていくと、最初は時を得ず力も発揮できない「潛龍」の状態です。その潛龍が大いなる志を持つことによって、ある一定の期間を隔てて大人と出会い、その出会いによって潛龍は「見龍」に成長していきます。自分で自分の姿が見え、人からも認められて、社会である程度役立つ存在になるわけですね。

見龍は大いなる循環を起こすためにワンステップ上がった状態で、基礎力をつけねばならない時期です。この見龍が見習うべきは本来の龍の姿であり、志であり、本来の力の発揮の仕方です。

伊與田　将来「飛龍」になるためにはまだステップが必要ですね。

竹村　はい。見龍になり次に進むと「君子終日乾乾し、夕べに惕若たり」という段階です。

「終日乾乾し」とは「朝から晩まで一日中、前向きに積極的に努力して進んでいくこと」、「夕べに惕若たり」とは「夜になったら、きょうはこれでよかったのか、あれでよかったのかと省みなさい」という意味です。これは『中庸』や『大学』でいう「慎独（独りを慎む）」にも通じることですね。

ここでも陽（日中の行動）と陰（夜の自省）は龍の中で一つであることが求められています。「見龍」は基本はできていても応用力はありませんから、応用力を養うために意志を持って努力して進んでいくのがこの「乾惕」の時代です。

驕り高ぶった龍は いずれ失墜していく

竹村　「乾惕」の反復を続けて継続していった時に、突然力がついてきます。何が起きても対処する能力と、その状況を好転させて推進していくだけの力です。リーダーとしての素養もこの時期までに養っていなくてはなりません。そして「乾惕」の龍はやがて「躍龍」になるのですが、この段階では一瞬躍ったとしても、まだ飛龍ではない。いわば飛龍のまねごとでシミュレーションです。

そして飛龍になる前に、もう一度潛龍の志に返って、自分がやろうとしていることが間違っていないか、志が変わっていないかを確かめなくてはならない。なぜなら『易経』が一貫して言っているように志は変質変容していくもので、地位が上がるほど、おいしいことが出てくるほど、人間はそれが欲しいがために志をそれに合わせるようになるからです。

そしてその段階では機、兆しを観る力をつけることも重要です。見えないものを観る力がついた時、ようやく飛龍になります。そうなるとあらゆる物が、時も処も位もすべて飛龍の大きな流れをかたちづくるようになります。躍龍は周囲に押されるようにして時を得て飛龍となって空中を大いに翔けめぐりながら、雲を呼んで恵みの雨を降

らせるんです。

伊與田　なるほど。

竹村　飛龍は自分が歩んだプロセスが分かっていますので、最初の頃は周囲に感謝しながら注意深く、慎独しながら進みます。しかしある期間が過ぎると、物事があまりにうまくいくので、優秀な龍であればあるほど知らず知らずのうちに驕り高ぶった龍になっていきます。ふと気がつくと陰、つまり雲たちはもうついてこられなくなっている。

雲を呼んで雨を降らせるのが本来の龍の役割でした。これが失敗する龍だったら周囲も忠告できるんですが、あまりに優秀で見事に役割をこなすものだから、陰は離れていってしまい、ハッと気がついた時には雲はずっと下のほうにあって、雨を降らせない龍になってしまっているんです。裸の王様で、誰も注意をしてくれない。役割を果たせないまま龍は失墜していくわけですね。

伊與田　「乾為天」の「亢龍悔いあり」とはそういうことですね。

竹村　ええ。『易経』はいろいろなところで急激な変化による禍は人災である、緩やかな変化が本当の循環であり時の流れであると説いています。ですから亢龍にならないために、飛龍の段階で陰を生じさせていく必要性が書かれてあるんです。

一つには「乾為天」にある

「大人を見るに利ろし」

という言葉があげられます。大人を探し出して学びなさいということで、謙虚でもマイナスの情報でも自分以外のすべての人の声に謙虚に耳を傾けること。これが陰を生じさせていくことになるわけです。独りを慎むというのも陰の要素です。

自分の力を発揮するのは陽、人を育てるのは陰です。経営者であれば後継者や若い人を育てるのも大事になってくると思います。そして器量を発揮するのは陽の力で度量を保つのは陰の力です。このように陽がどんどん強くなっていく飛龍にとって一番大事なのは、陰をいかに自分の中で生みだしていくかです。そうなれば飛龍として雲を呼び雨を降らせることができるんです。

これからの時代に求められる陰の徳

竹村　あとは伊與田先生、足らざるを補足していただけますか。

伊與田　いや、竹村先生の話を聞きながら僕はいまとても感銘を受けています。龍の話を、よくもあれだけ現実に即しながら説かれたものだと思いましてね。僕のほうから特別に補足することはありませんが、この次はやはり陰の徳ということも深く研究なさってはいかがかと感じました。

竹村　ああ、「坤為地」のことですね。「乾為天」と対になっている……。

その中には例えば、

「霜を履みて堅氷至る」

という言葉もあります。晩秋の早朝に庭に出てみたら霜がかかっていた。その霜を見た瞬間に「これは踏んだらすぐに消える霜だけれども、やがては厚い氷になるんだ」と兆しを読み取っていく、といった教えが書かれてありますね。

伊與田　はい。そういうことを取り合わせてお説きになったらいいのではないかと。特に東洋思想は陽よりも陰を重んずるところがありますからね。陽に走りがちな現代人を調和させるブレーキ役としても、未来に向けてとても大切だと思うんです。

竹村　私は『老子』が大好きなのですが、その中に「谷神、死せず」とあるんです。子どもを産み育てる女性のように、万物を育む天地造化の働きは永遠に続くと説かれています。易を学ぶうちに、これはまさに陰のよさが発揮された「坤為地」そのものだと思うようになりました。

それで龍の変遷の話では、私は目立たずに静かに力を蓄えている潜龍が一番好きなんです。潜龍が一番可能性に満ちていて、どの成長過程にあっても必ず潜龍に戻らなくてはと自分を戒めています。だからいつも潜龍元年だと思っています。

伊與田　おっしゃるとおり陰はとても大切です。宇宙を示す「乾坤」という言葉があるように、陽（乾）陰（坤）は一つで、万物はそこから発生するわけです。純粋な陽、純粋な陰というものはありません。易には陰陽の両面があり、「乾為天」と比べて陰により焦点を置いているのが「坤為地」なんですね。

竹村　確かに「乾為天」が全部陽の爻で成り立っているのに対して「坤為地」は反対にすべて陰の爻で成り立っています。

先生からとても難しいテーマをいただきました。実は私もそれをやりたくて何年も前から一所懸命研究しているんです。でも龍の動きが元になっている「乾為天」と違って「坤為地」はイメージを膨らませにくい面がありますので、なかなか苦労しています。先生

の言葉を励みに挑戦していきたいと思います。

伊與田　「坤為地」というと僕には一つの思い出があります。「坤為地」のおかげで思いがけない恩恵を受けたことがありましてね。

竹村　思いがけない恩恵ですか。

伊與田　僕が戦後、太平思想研究所を立ち上げた時、それだけでは生活できなかったので印刷所の職工になったんです。漢字や何かはたくさん知っておるけれども、仕事となると違う。一人前になるまでには何年も修業せねばなりません。最初はたいした仕事もできずに給料も安かったんですが、数か月たった頃、社長がPTAの会長をしていた関係でたまたまある中学校に行く機会がありました。

講堂にまいりましたら多くの方々が何やらワイワイ言っとる。講堂の正面に掛かっている額が読めないというんです。それは天養木堂翁（元総理）揮毫の「含章蘊蓄」でした。「坤為地」にある「含章可貞」（章を含みて貞にすべし）の含章に蘊蓄を添えたものでした。謙虚にして自己の抑制に努め、才能の美を含み隠しなさいという言葉でした。それなのに僕は場所柄もわきまえず、その出典と意味を滔々と話したら皆傾聴してくれたんですね（笑）。

会社に戻ると、社長が僕を呼んで「あなたの会社では職工でもああいう教養人がいるのですかと言われてきょうは自分も鼻が高かった。明日からは工場に行くのをやめて事務所に来なさい」と。僕は職を覚えようと思って入社したけれども、しょうがないから翌日事務所に行くと、あるのは椅子だけだ。その社長というのは大変な読書家で「これは自分に本を読めということだろう」と解釈して、それから毎日書庫に入って本を読みました。印刷のこともいろいろと勉強して、半年で印刷所一の物知りになった。挙げ句に社長からも「先生」と呼ばれて大事にされるようになりました（笑）。

竹村　先生のお若い頃の姿が目に浮かぶようですね。

上に立つ者ほど謙虚さを失ってはならない

伊與田　話は横道に逸れましたが、リーダーの心得ということになりますと、特に政治家にとっては「地天泰」にある教えも忘れてはなりませんね。

竹村　そうですね。

伊與田　普通は天（陽）が上で地（陰）が下です。ところがここでは地が上で天が下とひっくり返り、それが泰平の姿だとされている。陽は上に上ろうとする、陰は下に下がろうとする性質を持っているわけですが、これをひっくり返すことで、二つがよく結ばれるわけです。

政治の話でいえば、為政者は陽、民衆は陰です。会社でいえば経営者が陽で社員は陰。経営者が社員を大事にして下に下がろうという時、初めて泰平となるわけです。逆に社長が偉ぶっていたらどうなりますか。

竹村　お互いの気持ちは塞がったまま通じません。

伊與田　これを「天地否」と言いますね。これは家庭でもそうだと思います。やはりご主人が下で、ワイフを大切にするほうがよろしい。僕もあまり偉そうなことは言えんけれども……（笑）。とはいってもいまの世の中のように女性的男性、男性的女性になれというのでもない。

竹村　立場的に強い人が弱い人を大切にしているのが理想なのでしょうね。商売をしている方がよくおっしゃるには、女将さんがしっかりしている店は商いがうまくいくと。ご主人があまり出しゃばらず奥さんを上手に働かせていくことが繁盛の秘訣だというんです。「地天泰」とはそういうものかもしれませんね。

伊與田　水と火の関係も同じです。湯を沸かす時には火は下になくちゃいかん。上からいくら火を焚きつけても対流はなかなか起きません。そしてこの「地天泰」の姿を理想としたのが韓国です。韓国の国旗（太極旗）はそれを表していて、陰陽一体を示す太極図を中心にして四隅に☰天☷地☲火☵水の卦が配されています。

竹村　『易経』は非常にシニカルな面がありまして「地天泰」には、

「平かなるものにして、陂かざるはなし」

という言葉があるんです。要するに「存して」ぶるを忘れず」ということでしょうけれども、「安泰が続いてうまくいっているようでも、物事は絶えず変わっている」という警告なわけです。

伊與田　それもまた政治の要訣かもしれませんね。戦後の日本を見ると一見平和なようでも、いま申し上げたように女性が男性化し、男性が女性化している。これは大変危険な兆しだと思います。

元亨利貞に秘められた将の条件

竹村　『易経』についていろいろと話を進めてきましたが、その答えは「乾

為天」の中に全部入っていて、それこそ一番はじめの「乾は元いに亨る。貞きに利ろし」ということが本当に分かれば、そのままリーダーの心得ということになると思います。

元亨利貞の説明は私自身、一番時間がかかりますので、伊與田先生にぜひ説明をお願いしたいと思います。

伊與田 「元亨利貞」は易の根本ですね。この言葉は非常に奥が深い。一つひとつの文字にいろいろな解釈がありますし……。安岡先生は、この四つの言葉は「元」に帰一すると言っています。

「元」は時間的には「はじめ」、空間的には「もと」、全体的には「まったき」という意味がある。

「亨」はよく亨るということで、途中で屈しない。「利」は稲を刈る刃物のことでよく利く、役に立つ。「貞」は一時的に役に立っても駄目で終始一貫性がなくてはならない、ということです。

天地万物を通ずる生成化育の働きはどこまでも進行して、停滞休止するものではないということですね。

竹村 リーダーたるもの、正しいことを固く守って発展していくことが大事だという教えでもありますね。

伊與田 そうですね。

竹村 私は「元亨利貞」の後に出てくる、

「雲行き雨施して、品物形を流く」

という言葉もリーダーの心得として大事な教えだと思います。「雲行き雨施して」とは先ほど申し上げた雲を呼んで雨を降らせる大いなる循環で、「品物形を流く」というのは、一人ひとり、一品一品を生かすことです。

例えば経営者であれば従業員一人ひとりの能力、生きがい、徳性、持ち味を最大限に発揮して幸福感を味わわせてあげねばならない。『易経』にはそういうことが繰り返し説かれています。

伊與田 上に立つ者の条件として僕が竹村先生のお話に一つ付け加えるとすると、次に大切なものはやはり謙だと思う。『易経』でいうところの「地山謙」です。

竹村 「地山謙」には真のリーダーのあり方が説かれていますね。その名の示すとおり上が地で、下が山になっています。山のほうから自ら快く地の下にへりくだっている状態を言っているわけですね。

伊與田 はい。勢いある乾であればあるほど、謙でなくてはならない。将たるものにとって忘れてはならない大切な条件だと思います。

竹村 そのことは先ほどの「坤為地」と組み合わせるとよく分かるように思います。

きょうはいろいろなことに気づかせていただき、また宿題をたくさんいただきましてありがとうございました。『易経』は指導者にとって必読の書であると改めて実感しました。

伊與田 いやいや、こちらこそ。忘却の彼方に行っていたのを、竹村先生に引き戻していただきました(笑)。

竹村 私の話に黙って耳を傾けてくださった伊與田先生の姿勢は、まさに「地山謙」そのものと感動しています。

月刊『致知』を贈って、贈られて

読者の皆様から寄せられたメッセージを紹介します。

『致知』ものがたり その5

石邨さんは、五人姉妹の長女。十歳以上歳の離れた一番下の妹さんへ、「末っ子は甘えてばかり、もっと『致知』を読み素晴らしい方々の生き方を学んで欲しい」との思いから贈呈をされました。

『致知』を読み始めたのは四～五年前。きっかけは、親友のお嬢さんが岡山木鶏クラブの熱心な会員で、その方の勧めによるものでした。それ以来、私は大好きな『致知』を毎号隅から隅まで読み尽くします。特に「巻頭の言葉」はいつも心に残り、趣味の仲間に知らせたり、読み終えた『致知』を、社会人となった孫に、往復一時間歩いて届けに行っています。

岡山県岡山市　石邨詩南子様

あなたも「致知」を読む喜びを、あなたの大切な方に贈りませんか？　あなたからの、心のこもったメッセージを添えてお届けいたします。

『致知』ギフト

ギフトのお申し込み方法は、81頁をご覧ください。